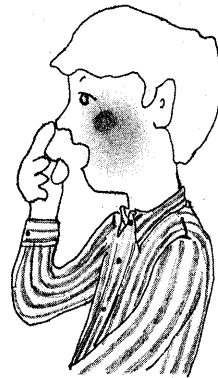


電話

松井 とし



受話器をとると、鼻息だけが聞こえる。甥である。一歳前後の子供は、電話に興味を示す。ベルがなる不思議、ダイヤルをまわすおもしろさ。受話器の向こうから声がきこえる楽しさが、いっばいつまっているのだろう。

二歳をすぎ、おしゃべりになった甥は、話の途中で「みえる？」を連発していた。手にしているお気に入りのおもちゃのこと、その場に展開している楽しさを共感してほしい気持ちが伝わってくる。傍で「テレビ電話じゃないのよ。」と笑う母親の声が聞こえる。

そして、五歳になった甥は、目下、友だちとの遊びを生活の中心にすえ、その興味を、広げるのに忙しい毎日である。めったに電話はかかってこなくなった。

日男は自閉症と診断された子どもである。統合保育を実践している私共の園に入って数

日後、新入園児歓迎会の朝、母親から「休ませる」旨の電話があった。疲れ気味だし、集団が一堂に会する場では、H男が不安定になるだろうという心配であった。その時、H男が電話に出たがっているから話をしてやって欲しいと言われた。

「H君、疲れちゃったの？ 明日、待っているから幼稚園で遊びましょう。明日来てね。待っているわね。」

「あした、いくの、いくの。」

ところがしばらくするとH男が現れた。びっくりする私に母親が言うには、電話を切った後「せんせいのところへいく。」と支度を始めたのだという。私は再び驚いた。H男は電話のやりとりで相手の存在を実感し、その上、その人との関係で行動を起こした。出会ってからまだ数日の私との関係を、H男はしっかりとらえ、求めてくれたのである。その後も時々、H男から電話がかかった。「まついせんせい。」とつぶやくだけの電話だが、新しい環境に馴染もうとするH男にとって、電話は大きな意味をもっていた。ストレートに自分を表出する事のできないH男は、電話を通して信頼関係を確かめていたのであるか。

(神奈川県立教育センター)